経営の散歩道 一〇八回

川中経営所長 川中清司

赤穂義士と萬慶寺 その5

▼元禄十六年が明けて一月の半ばすぎ、間部詮房は承天和尚を江戸・品川の廣岳寺に尋ねた。

赤穂浪士が仇討ちしてから一ヵ月たったいまも、忠義を貫いた彼らの行動が詮房の心をゆさぶり続けた。

「赤穂浪士を死なせてはならぬ」

義士たちの命を救うことが、堕落し頽廃した武士道を守ることになる。

将軍綱吉は熱心に儒学を奨励し自ら「孝経」を講義して、君に忠、親に孝こそ世の中の基本であると説いている。若し義士たちを処刑したなら、忠孝をすすめる主旨にもそむくこととなる。

しかし浪士助命の見通しは暗い。学者の議論は真っ二つに分かれて、仇討ちは忠臣の義挙と肯定しながらも騒乱を起こした罪は処断すべきだという荻生徂徠の法律論が優勢で、このままでは幕閣も切腹を決めかねない。

▼廣岳寺の庭には梅が咲きはじめ、時おり鶯が鳴いた。

承天和尚は茶をすすめながら詮房の話に頷いていたが、

「拙僧は、無有恐怖（むうくふ）を祈っておりますのじゃ」

と口を開いた。

和尚が仏に祈るのは浪士たちの延命だけではなかった。

たとえ幕府の決定が死罪と決まっても、それを恐れずにうけいれて静かに死んでいく、そういう心をもたせてやりたい。今はただ、誇りも捨て、生への執着も捨て、生死をこえるところに、むしろ今を生きるよろこびを求められるはずである。

「生をあきらめ死をあきらめることこそ、仏家一大事の因縁にござりまする」

人間にとって一番の恐怖は死である。誰の身にも死は必ずおとずれてくる。死はさけて通れぬことわりである。

所詮は生も死も無常のこの世の一現象にすぎない。とは解っていても諦め切れないのが人間なのである。生きたい、死にたくないと、その執着から脱けられずにもだえ苦しむのである。

執着することのない心。これを〝無罣礙（むけいげ）〟という。そこに達すれば、恐れのない〝無恐怖〟に至れるのである。

そのために般若心経を念じ、「無罣礙故　無有恐怖」と祈るのである。

「助命にこだわってはならぬ。いまのまま生死の執着を捨てることだ」

和尚との対話のあと、詮房はふっ切れたような明るさを覚えた。

「大石ほどの男だ。すでに心得ているはずだ」

と、帰りの駕籠の中でひとりつぶやいていた。

▼その頃、細川越中守の邸にいる大石内蔵助も同じ心境でいた。

幕府のいかなる裁断も静かにうけいれ、従容として死に就きたい。若い士たちは不憫だが、大望を果たしたよろこびを胸に抱きながら往ってほしい。

「生死一如か」

またあの世とやらで、楽しく語り合おうよ。

見上げる江戸の空は晴れて、鳶がゆっくりと大きな輪をかいていた。

▼一月二十一日、側用人柳沢吉保は荻生徂徠の作った浪士処分の上申書を綱吉に奉呈した。

綱吉は何度も読みかえしながら、早う決めねばならぬな、とつぶやいたあと、

「切腹せしめよ」

と申し渡した。

しかし吉保がさがっていったあと、再び「あれほどの忠臣の命、救えるものなれば」とまたしても思い悩んだ。

一月二十二日、幕府は身柄預けの四大名家に対し、浪士四六人から自署の親類書きを差し出すよう命じた。刑がきまり罪を親族にまで及ばせる為のものだ。

これが知らされると浪士たちは、いよいよ処刑の日が近いことが分かった。

▼二月一日は恒例の年頭登城の日で、日光門主公弁親王も登城した。

法親王から助命の話があれば、仏門下の特赦という取り扱いの道も開ける。綱吉は接遇の間に、

「赤穂の忠臣どものこと、法を以て処断すべきなれど、その命たすける道あらばと存じ、気苦労いたしております」

と、遠回しに宮からの命乞いを求めた。しかし宮は、

「ご苦労のほど察しいる」

と言っただけで退出してしまった。

上野の寛永寺に戻った宮は、

「将軍の気持ちはよくわかるが、浪士たちを助命すれば晩年を誤る者のでるやもしれず、却って慈悲にもとることとなろう。忠臣のまま散らせる方がよいのではないか」

と側近にもらした。

この言葉が綱吉に伝えられ遂に助命は断念された。

▼二月三日、明日切腹を行う旨の内示が伝えられた。四大名家では床の間に新しい花を生け、夕餉にはささやかな酒宴をもてなし、今までの接伴役もこれに加わった。

二月四日、この日は朝から小雨が降っていた。十時すぎ幕府から切腹命令を携えた上使が到着した。午後を大分まわった頃から、検死の見守るなか四六人の浪士たちは、静かにそして見事に切腹をとげ、死出の道を旅立っていった。

―つづく―